

219-1953

日本組織培養学会

昭和63年8月20日

会員通信

第66号

発行責任者

鈴木利光(新潟大・医), 菊川忠裕(聖マリアン
ナ医大), 許南治(東大・医科研), 間中研一
(獨協医大), 大島浩(大阪歯大)
新潟市旭町通1(〒951)
新潟大学医学部第1病理
電話(025)223-6161 内線2281



会長の任期を終わって

佐藤二郎

やっと終わったというのが私の現在の実感です。1984年(昭和59年)4月より山田正篤会長の後を受けて今日まで4年間、就任時御挨拶として述べた「我が日本の組織培養学会の偉大なパイオニアであった勝田甫先生によって永年培われて来た古き良き伝統と山田正篤前会長を始めとする前幹事諸兄が試みられた現代への注目すべき対応を踏まえて古き良き習慣と新しい気風を織りまぜながら未来の日本組織培養学会への理想像に向って、ねばり強く努力精進したいと思います。」を会長としての決断の指標として過して参りました。

4年間多くの出来事がありました。その原因は、善悪は別として会則の変更に基づくものが多く見られました。学会という組織の責任者として、永年の検討・努力によって承認された規約は、学会として出来る限り朝令暮改ともとれる文章上の変更はしない。然し乍ら現状の日々の執行において、学会の活性化や発展に支障があると考えられる規約の事項については幹事会での忌憚のない討議の上、運用面での対応を考え実行して来ましたが、実行してきた主な点は下記の通りです。

- ①会員通信の充実、②国際担当係の設置、③会員の増加、④秋のシンポジウムの開催、
- ⑤組織培養研究の年2回発行並びにそのあり方の集約、⑥奨励賞選考規定の作成と実施、
- ⑦年会費の値上げ、⑧国際細胞培養会議の規約の合意と発表

以上任期を終えての感想ですが、2回にわたって幹事会での御協力いただいた幹事諸兄に心からなる感謝の意を捧げて、この御挨拶を終わらせていただきます。

会長就任のごあいさつ

黒田行昭

本年2月の会長選挙によりまして、4月から向う4年間、会長をお引受けすることになりました。新しく選出されました幹事の皆さんのご協力を得て、本学会の発展のために努力して参りたいと存じております。本学会が会員の皆様にとってもさらに意義のある学会として行くために、この学会のこれまでの歴史を少し振り返って、今後の発展の“てがかり”にしたいと存じます。

日本組織培養学会が産声を上げたのは昭和31年で、当時東京大学伝染病研究所（現医学研究所）におられる勝田甫博士（当時助手）の呼びかけにより発足しました。第1回研究会は勝田博士のお世話で、昭和31年9月30日の日曜日に開かれました。この研究会はプログラムも勝田博士のガリ版刷り、会場も伝研の小さな会議室で行われ、発表演題も8題でした。午前中4題、午後4題の発表が行われ、参加者も20名位で丁度研究室で行われるセミナーのような感じでした。この時の講演発表者で現在も本学会員でおられるのは、私のほかには山田正篤、堀田進、川原春幸の諸博士のみとなりました。

この第1回の研究会には、私もまだ弱冠31才で、集まった方々も勝田博士を始めほとんど30代、40代の助手クラスの方々ばかりで、私は“ショウジョウバエのメラニン性腫瘍の組織培養”と題して講演を行っています。その年の12月に第2回を、翌昭和32年2月に第3回を、さらにその年の11月に第4回とたて続けに4回の研究会をやり、第4回からは会の名称も“組織培養学会”と改めました。昭和34年6月の第7回研究会を当時大阪大学に在籍していました私がお世話して開きました。

この学会は、医学、理学、薬学、農学など現在では“ライフサイエンス”と呼ばれる各分野の研究者が、その出身学部や所属学部、所属学会などの“枠”や“しがらみ”を越えて、“組織培養”というただ1点の共通項のもとに、それぞれの専門分野での新しい研究成果を紹介し、プログラムも1人の持ち時間が発表30分、討論20分というように新しい培養技法の開発や、苦心談、失敗談などを中心とした討議がなされてきました。質問も、「このような研究をして何の意義があるのか」とか、「この研究はどこが Neues で、originality があるのか」といった辛辣なものも多く、発表者は20分の討議時間を無事に切り抜けるのは容易ではありませんでした。

また、学会への入会の条件も厳しく、“実際に培養の仕事をして1年以上経験していること”と、“培養に関する論文を2編以上発表していること”の2条件が満たされないと、

入会は認められませんでした。この入会条件はその後かなり長く続きましたが、組織培養の技法が特殊な限られた人達が偉い先生について、“でっち奉公”をして習得する“職人かたぎ”の技術ではなく、合成培養液やプラスチックの使い捨ての市販の材料を使って、“生きもの”を研究対象としている研究者ならば誰でも手軽に使える技術になり、その利用が広く各分野に浸透、拡散するに従って、この入会条件は廃止され、現在では組織培養に興味のある方ならば誰でも会員2名の推薦があれば入会が認められるようになりました。

もう1つこの学会のユニークな点は、学会長が長い間おかれず、幹事のみで運営を行い、それも幹事は40才以下という年齢制限があったことです。しかし、発足当時勝田博士を含めてほとんど30才代の若い人達で始まったこの会も、ほとんどの会員がしだいに40才を超えるようになり、幹事の年齢制限も現在の40才以上4名、40才未満4名というように改められました。他の学会の幹事や運営委員が、多くは各大学の教授や長老で占められているのに比べますと、この学会の体質を若く保つ上で、この制度は確かにすぐれた点があると思われれます。

今や本学会は正会員が700名となり、名誉会員、外国会員、賛助会員を加えますと800名に近い会員を擁する学会に成長しました。毎年開かれる大会では外国からの一流の研究者を招いて行われる招待講演やシンポジウム、ワークショップ、一般講演など発表される演題数も飛躍的に増大し、本年5月大分で開催されました第61回大会では、セッション・イン・デブスという新しい試みも導入され、演題数も合計で70題にもなり、内容においても数においても非常に充実した広い専門分野にわたった研究成果が発表されています。

しかし、一方では、限られた時間にこれだけ多数の演題を消化するため、講演時間もシンポジウムでも討論を含めて30分、一般講演では1題わずか9分の発表と3分の討論を強いられる状況に陥っています。

学会に参加される方々の目的の1つは、自分の研究成果を発表してこれに対する有益な助言を得、また他の研究者から新しい知見を得ることにあるのは確かです。しかも、本学会のような組織培養の技法という共通点を主軸として、それに関連した知識の交換を主要な目標の1つにした学会では、もう少し参加者の間での討論の時間が多くあることが望まれます。この意味でも発足当時の1題50分もかけて発表と討論を行った“ぜいたくさ”はもう現在では望めないかも知れませんが、何とかその精神を生かす方法を模索したいと存じております。

本学会では、研究会として発足した昭和31年から“Tissue Culture studies in Japan, The Annual Bibliography”を発行し、毎年その前年に発表された会員以外の方も含めたわが国の研究者が専門誌に発表された組織培養に関する論文や著書を著者名、表題、掲載誌、英

文抄録について収録し、学会として刊行してきました。これは昭和55年まで続き、外国の大学、研究機関にも200カ所以上送付して参りました。

私も昭和38年から昭和45年まで8年間にわたってこれの編集にあたりましたが、多岐にわたる専門誌から日本語のものも含めて、組織培養に関する論文を逐一選び出し、和文のものは英文に直して収録する作業は大変なもので、全くの奉仕作業として夏の7、8月の2カ月は毎年これに費やされました。これはわが国における組織培養の研究活動を諸外国の研究者に紹介する上で大変役立つようです。

しかし、この刊行物も昭和55年に当時の編集幹事の不幸から文部省の刊行助成金が打ち切れ、また学会としても学問の進歩にともなってその存在価値がうすれたことから発行をやめ、昭和57年から現在の「組織培養研究」が本学会の機関誌として毎年2号分が刊行されるようになり、主として大会やシンポジウムの発表内容を収録しており、現在の学会での研究活動を把握し、記録するには大変役立つものと思われます。しかし、今後、これを英文誌など原著論文を含めた学会誌として発展させるため、学会として検討委員会を設けて検討したいと存じております。

学会は専門の研究者の知見交換の場であるとともに、他の専門分野の方々に対しても広く門戸を拡げ、とくに学生や大学院生を含む若い研究者に対しても教育研究を行う責務があると存じます。本学会は、すでに教育研究システム委員会を通じてこの問題を検討し、「組織培養の技術」や「細胞成長因子」を刊行して参りました。今後もできるだけこのような活動を続けるとともに、とくに組織培養の研究者にとって必要な「細胞バンク」のあり方とその利用について、今回新たにワーキング・グループを設けて検討したいと考えております。

若い人達の集まりから出発したこの学会が、いつまでもその若いエネルギーを保持して、最近のバイオテクノロジーの技術の基礎をふまえた学術的団体として進むことを念願しております。これによって、会員の皆様方のご協力を得ながらわが国のみならず、世界各国の組織培養の研究者とも連携を保ち、今後さらに発展して行くことを希望しまして、学会長就任のごあいさつといたします。

§ 新旧合同幹事会議事録

日 時：昭和63年 5月19日（木）午前 9:00～11:00

場 所：大分市府内町 1-4-28

小田急センチュリー大分 3階 富士の間

出席者：佐藤二郎（前会長），高木良三郎，蔵本博行，乾 直道，加治和彦，小野順子，松村外志張，小山秀機，許 南浩，渡辺正己，間中研一，宮崎正博（以上前幹事）
黒田行昭（新会長），難波正義，梅田 誠，鈴木利光，桶田俊光，菊川忠裕，中野修治，水沢 博（以上新幹事）

1. 前会長挨拶

佐藤前会長よりご挨拶があり，新旧合同幹事会が開会されました。

2. 新会長挨拶

黒田新会長より就任のご挨拶がありました。

3. 自己紹介

旧幹事11名，新幹事7名の自己紹介が行われました。

4. 旧幹事報告ならびに申し送り事項

(1) 庶務幹事報告（蔵本，宮崎）

- ◎ 本学会の長年の懸案であった奨励賞が設立され（会員通信第63号参照），選考規定にのっとり厳正に審査され，昭和62年度は1名，同63年度は2名の会員に授与されること，また表彰賞は佐藤前会長名で行われることに決定されました（会員通信第65号参照）。なお，表彰状の図案化，作製は前会長より委託されました許幹事により行われました。
- ◎ 本学会会計を検討するためのワーキング・グループが編成され（会員通信第63号参照），年会費値上げ案が提出され，決定されました（会員通信第64号参照）。
- ◎ 本学会機関誌を検討するためのワーキング・グループが編成され（会員通信第63号参照），幹事会から独立した編集委員会を発足させる案が提示されました（会員通信第65号参照）。この件についてはさらに具体的な検討を要するため，新幹事会への申し送り事項とすることに決定されました。

- 本学会制度上の問題点について種々検討されました（会員通信第65号参照）。大変重大な問題であり、さらなる検討を要するとの意見で一致し、この件については新幹事会で継続審議していただけるよう申し送ることになりました。

(2) 編集幹事報告（加治）

- 秋期シンポジウムを下記のとおり2回開催しました。

- ① 「血管内皮細胞——その発生、障害、修復と増殖：in vivo および in vitro から——」

昭和61年11月15日（土） 東大薬学部記念講堂

世話人：三井洋司，加治和彦（会員通信第60，61号参照）

- ② 「神経系細胞の培養——in vitro 機能発現と分化の誘導——」

昭和62年11月10日（火） 新潟大学医学部有壬記念館

世話人：鈴木利光，福田 潤，加治和彦

参加者90名，うち研究者は約70%であり，盛況でした。

本シンポジウム開催にあたって，鈴木会員のご尽力に感謝いたします（会員通信第63，64号参照）。

- 研究誌第5，6巻第2号はいずれも秋季シンポジウムの内容を中心として，その他総説等を掲載して発行しました。2回の発行を経て，この方針がかなり定着してきた感があります。
- 会員通信第60号から第65号まで計6回発行しました。幹事会・総会議事を詳細に報告しましたので，各号の volume が増大しました。会員の意見を募集しましたが，集まりませんでした。

(3) 研究誌担当幹事報告（渡辺）——前項(2)参照

- 第5巻2号（約160頁），第6巻2号（約80頁）の計2回の発行を行いました。が，元来発行方針がないまま春，秋のシンポジウムのプロシーディングになっています。これでは発行意義が薄くなりますので，今後は編集委員会を設立し，編集方針を立てるべきだと思います。
- 発行費については，担当幹事が広告収入として120～130万円程度準備し，差額を学会が支援するという形態をとってきましたが，当初予算が明確でないので良い企画を立てにくいのが現状です。今後発行経費は学会が負うべきであり，上記と併せて新幹事会で継続して検討していただきたいと思います（会員通信第65号

ワーキング・グループ報告参照)。

(4) 会員通信担当幹事報告(許, 間中) — 前項(2)参照

- ◎ 幹事会議事をできるだけ詳細に記載し、会員各位に知らせること、また通信を楽しい読み物とすることを目標に発行してきました。前者については庶務幹事の協力により、かなり目標を果せましたが、後者については会員各位からの自主寄稿があまり得られず十分に果せませんでした、今後に期待します。
- ◎ 発行経費節約の目的で、1回だけワープロ形式で印刷、発行しましたが、字が小さすぎて読みづらいとの意見が多く、元の印刷形式へ戻しました。
- ◎ これまで会員通信は、印刷から発送まですべて学会事務センターに依頼していましたが、担当幹事が直接別の印刷業者に印刷・製本を依頼することにより、経費をかなり節約することができました。

(5) 会計幹事報告(乾, 松村)

- ◎ 昭和62年度決算が難波、小山両会計監事により承認されました(別項記載の会計報告参照)。
- ◎ 昨年癌学会後に開催されました会計ワーキング・グループの会合で、IACC加盟ならびにその活動費等も見込み、年会費値上げ(正会員1,000円、賛助会員10,000円ずつの値上げ)案がまとめられ、旧幹事会(昨年11月9日(月))で承認されました(会員通信第64法参照)。
- ◎ 昭和63年度予算(旧幹事会承認済)を新幹事会も承認しました(別項記載参照)。

(6) 国際担当幹事報告(小野, 高木)

- ◎ IACC(ヨーロッパ、アメリカならびに日本)における我国の立場(力関係)を守る上で会員数、学会誌等の出版活動が大変重要な要因になっているので、この点に関して新幹事会で充分検討していただきたいと思います。また従来のアカデミックな雰囲気を守ってほしいと思います。
- ◎ 昨年3月30日(月)、米国 People to People財団一行(Dr. Mc Garrity 団長)との Joint Meeting が奥村国際担当幹事のお世話で開催されました(会員通信第63号参照)。今後このような対外活動に対し、学会としてどう対処するか方針を検討していただきたいと思います。
- ◎ ビブリオグラフィーについて外国から問合せがあり、廃止した旨返事しました。

- ◎ IACC委員と外国（渉外）担当幹事の役割を明確化するよう検討していただきたいと思います。

5. 次期（第62回）大会世話人

旧幹事会（本年3月18日）にて、蔵本博行氏（前庶務幹事）をお願いすることに決定され、新幹事会もこれを承認しました（会員通信第65号参照）。

6. 本年度秋期シンポジウム

旧幹事会（本年3月18日）にて、梅田誠氏（新幹事）にお世話をお願いすることになっていましたが（会員通信第65号参照）、同氏の多忙のためご承諾が得られませんでした。この件について新幹事会で引き続き、早期に検討していただくことになりました。

7. その他

(1) 佐藤前会長より、IACC設立までの経過説明がありました（会員通信第56, 58, 60, 63, 64, 65号参照）。本学会会則第4章第9条に基づき、会長は渉外の責任者であるから委員としてIACCに参画することが妥当であり、黒田新会長に佐藤前会長のIACC委員の残任期間（3年）を引き継いでいただきたいとの申し出（旧幹事会承認事項、会員通信第65号参照）に対し、黒田新会長はこれを承諾されました。

(2) 新入会員への対処の仕方

高木大会世話人より、演題抄録集の送付において混乱を生じるので、今後どの時点から正会員として対処していくか等について検討していただきたいとの提案がありました。

(3) 旧庶務幹事より、本学会役員の選挙公示・案内、被選挙人名簿作成等のモデル案（下記）の提示があり、新幹事会で引き続き検討することになりました。

記

幹事単独選挙の場合（案）

① 選挙公示

次期の日本組織培養学会幹事を選出するための選挙を実施するよう、会長から選

挙管理委員を委託されました。

つきましては、日本組織培養学会細則にのっとり、次のように実施しますので、
棄権なきよう、ご投票の程お願いいたします。

記

・選出役員

幹事 8 名（40才未満，40才以上各 4 名）

・投票方法

無記名，郵送による。

（投票用紙，被選挙人名簿，宛先入返送用外封筒ならびに内封筒は同封されて
います。）

・投票締切

昭和〇年〇月〇日（消印有効）

<注意> 下記の場合は無効となります。

- ・指定の投票用紙（学会印刻印）を使用しなかった場合。
- ・返送用外封筒に氏名，所属機関名，所属機関住所の記入のない場合。
- ・返送用封筒に 1 枚以上の投票用紙を同封した場合。
- ・投票用紙を指定の封入用内封筒に封入していない場合。

以上

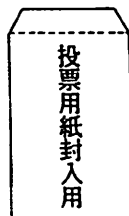
選挙管理委員： _____， _____

② 投票用紙，中封筒，返送用封筒

投票用紙	
幹事（40才以上）	

幹事（40才未満）	

日本組織培養学会 ㊤	



住所	
日本組織培養学会	
選挙管理委員	
殿	
氏名	
所属機関名	
同住所	

③ 日本組織培養学会幹事選挙 選挙人・被選挙人名簿

○印40才以上

幹事選挙に被選挙権のない方（選挙人・被選挙人名簿にBと表示）

前幹事 _____, _____,

現幹事 _____, _____,

氏名	研究機関	氏名	研究機関
B○.....
B			

会長・幹事同時選挙の場合（案）

① 選挙公示

次期の日本組織培養学会会長ならびに幹事を選出するための選挙を実施するよう、会長から選挙管理委員を委託されました。

つきましては、日本組織培養学会細則にのっとり、次のように実施しますので、棄権なきよう、ご投票の程お願いいたします。

記

◦ 選出役員

会長 1名

幹事 8名（40才未満，40才以上各4名）

◦ 投票方法

無記名，郵送による。

（投票用紙，被選挙人名簿，宛先入返送用外封筒ならびに内封筒は同封され

ています。)

・投票締切

昭和〇年〇月〇日 (消印有効)

<注意> 下記の場合は無効となります。

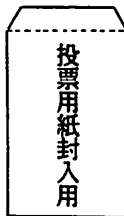
- ・指定の投票用紙 (学会印刻印) を使用しなかった場合。
- ・返送用外封筒に氏名, 所属機関名, 所属機関住所の記入のない場合。
- ・返送用封筒に1枚以上の投票用紙を同封した場合。
- ・投票用紙を指定の封入用内封筒に封入していない場合。

以上

選挙管理委員: _____, _____

② 投票用紙, 中封筒, 返送用封筒

投票用紙	
会長	
幹事 (40才以上)	
-----	-----
幹事 (40才未満)	
-----	-----
日本組織培養学会 ㊤	



住所	
日本組織培養学会	
選挙管理委員長	
殿	
○	
○	
○	
○	
氏名	
所属機関名	
同住所	

③ 日本組織培養学会会長・幹事選挙 選挙人・被選挙人名簿

○印40才以上

会長選挙に被選挙権のない方 (選挙人・被選挙人名簿にAと表示)	
前会長	山田 正 篤
現会長	佐藤 二 郎

幹事選挙に被選挙権のない方（選挙人・被選挙人名簿にBと表示）

前幹事 _____, _____,

現幹事 _____, _____,

氏名	研究機関	氏名	研究機関
A○…………	……………	B……………	……………
B○			

§ 昭和63年度第一回幹事会議事録

日時：昭和63年5月19日（木） 午前 11:00～午後 1:15 （新旧引継の後）

場所：小田急センチュリーホテル大分 藤の間

出席者：黒田行昭，難波正義，梅田 誠，鈴木利光，桶田俊光，菊川忠裕，中野修治，
水沢 博，（オブザーバー）乾 直道，渡辺正巳

- 1) 新会長，黒田行昭先生のご挨拶により定例幹事会が開催されました。なお，新幹事のほかに旧幹事より乾直道，渡辺正巳両氏がオブザーバーとして出席していただくことが了承されました。

議題は新役員の担当分担について

新入会員の承認。

秋のシンポジウム開催について。

会員通信の発行について。

2) 新役員の分担を黒田新会長より提案され、次のように決まりました。

庶務幹事 難波正義 (正), 水沢 博 (副), (蔵本博行)

会計幹事 梅田 誠 (乾 直道)

編集幹事 鈴木利光

“会員通信” 担当 鈴木利光, 菊川忠裕 (許 南治, 間中研一)

“組織培養研究” 担当 中野修治, 稲田俊光

渉外, 国際関係担当 野沢志朗 (小野順子)

会計監査 小山秀機, 松村外志張

機関誌検討委員会 渡辺正巳 (委員長), 加治和彦, 中野修治, 稲田俊光

* カッコ内は新役員が仕事に慣れるまでの旧幹事の補佐役です。

なお, 各分担の仕事の内容をご紹介します。

庶務は会議全般の運営, 司会, 記録に加え, 役員間の連絡, 学会事務センターとの連絡などを行います。会計は組織培養学会の金銭出納に関することです。これはもっともわかりやすい仕事内容でしょうか。編集は, “会員通信” と “組織培養研究” の発行に責任を持ちます。渉外は主に外国の関連学会との事務連絡などが仕事です。

3) 新入会員の承認はあらたに申請のありました14名について審査をおこない, 全員承認されました。

4) 会員通信は学会やシンポジウムの前までに必ず発行することを確認しました。およそ, 3月, 7月, 11月を基準に年4回ほど発行できればと考えております。

5) シンポジウムに関しては昨年秋, 鈴木利光先生の御尽力により新潟大学において好評のうちに開催されましたが, 本年はまだスケジュールが確定するにいたっておりません。この通信が発行されるまでには方針を確定する予定です。

次に議題は旧役員会からの引き継ぎ事項の確認に移り重要事項について, ワーキング・グループなどの設置を決定いたしました。

- 6) 会計については旧役員会のワーキング・グループにおいて、通常会員の会費を現行3,000円から4,000円に、法人会員の会費を現行10,000円から20,000円にする値上げ案を総会に提出するということになりましたので、この時点で解散することになり、今期幹事会の中には特に設置しないこととなりました。
- 7) 組織培養学会でこれまで年2回発行してきている雑誌“組織培養研究”につきましては、研究会から学会になって昭和57年に第1巻第1号が発行され、現在のスタイルのまま今日まで継続して発刊されていますが、発行回数や、内容をより充実させ定期発行とする必要があるのではないかということで、これまでワーキング・グループを設置して検討してきました。主な論点は、学会の抄録誌ではなく研究誌として充実させる必要があるのではないか、現在の編集方法では良くも悪くも幹事の好き勝手に編集できてしまうが、そういったことで良いのであろうか、少なくとも一定期間一貫した編集方針を持った機関誌とする必要は無いのだろうか、出版費用を整備する必要があるのではないか、編集委員会を設置する必要があるのではないだろうか、等です。これらは、重要なテーマでしかも早急に結論を出す必要があることから、これまでのワーキング・グループを中心に機関誌検討委員会を発足させ、渡辺正巳氏にお世話をいただき、新しい編集幹事も加わって検討を行い、将来、場合によっては編集委員会を恒常的に設置することを含めて結論を早急に出すよう努力することになりました。
- 8) 組織培養学会の国際組織、IACCに日本組織培養学会から役員を出してきました。任期は4年で、佐藤二郎、高木良三郎、奥村秀夫の各先生をお願いしてきました。今回の日本組織培養学会の会長改選に伴い、佐藤二郎先生から黒田行昭先生に変わっていただくことになりましたが、それ以外の先生方にはそのまま継続していただくかどうかを今後検討することになりました。なお、IACCは仙台で国際組織培養学会が開催された年に、日本、アメリカ、ヨーロッパの培養学会が中心になって設立されました。各国の培養学会会員数が350名までの場合に3名の役員を出し、以後500名を超えるごとに1名ずつ追加することができるようになっております。IACCの現会長はアメリカ、IMRのMc Garityです。また、IACCの会費は米国に大きく依存している現状ですが、改善する必要があるという意見が提示されました。

§ 組織培養学会第61回大会総会議事録

日 時：昭和63年5月20日（金） 13:00～13:50

場 所：大分市府内町1-137-3 トキワ会館

総会は以下の次第で進行しました。

1. 議長選出

議長に東北大学名誉教授山根績先生を選出しました。

2. 第61回大会世話人挨拶

第61回大会世話人高木良三郎教授の開会の挨拶がありました。

3. 学会長挨拶

黒田行昭新学会長より就任の挨拶がありました（内容は別項に掲載しました）。

4. 報告事項

(1) 庶務報告

蔵本前庶務幹事より庶務報告

新旧合同幹事会議事について報告されました。

新庶務幹事より新幹事の紹介があった後、任務の分担について報告がありました（別掲1）。

(2) 会計報告

前会計幹事より会計報告がありました。

(3) 機関紙“会員通信”発行報告

機関紙、会員通信の発行経過について許、渡辺両前幹事より報告がありました（新旧合同幹事会議事録参照）。

(4) 国際関係報告

小野幹事よりIACCに関する報告がありました。

(5) その他

横浜市立大学梅田誠教授より細胞バンク小委員会をつくり、各種懸案事項を議論する必要があるとの提案があり、総会の承認を得ました。

5. 学会奨励賞授与

佐藤二郎前学会長より学会奨励賞が菅幹雄博士（東北大学）、宮崎正博博士（岡山大学）、武富真子博士（日本たばこ）に授与されました。

6. 協議事項

(1) 昭和62年度決算（前会計幹事）

(2) 昭和63年度予算（前会計幹事）

ここで、活動の強化のため一般会員1,000円、賛助会員10,000円の会費値上げの提案（新旧合同幹事会議事録参照）がなされ、賛成多数をもって可決されました。また、それにとまう会則の付則の変更も賛成多数で可決されました。

(3) 会則の付則変更について（前会計幹事）

(4) 昭和64年度（第62回）大会について（前庶務幹事）

組織培養学会第62回大会は蔵本博行博士の御世話で開催されることになりました。

(5) 昭和63年度シンポジウムについて

昭和63年度秋のシンポジウムは現在未定であることが報告されました。この件については黒田会長および幹事会で検討中であることが報告されました。

以上の内容にて総会は順調に進行し、閉会いたしました。

§ 役員及び担当

庶務幹事	難波正義（川崎医大）	水沢博（国立衛生試）
会計幹事	梅田誠（木原研）	乾直道（日本たばこ）

会員通信担当	鈴木利光 (新潟大・医)	菊川忠裕 (聖マリアンナ大)
	許南治 (東大医科研)	間中研一 (独協医大)
渉外幹事	野澤志朗 (慶応大・医)	
機関誌検討	渡辺正巳 (横浜市大)	加治和彦 (老人研)
	中野修治 (九大・医)	桶田俊光 (大分医大)

§ 日本組織培養学会第61回大会を振り返って

—— 限りなく in vivo を求めて ——

第61回大会世話人

大分医大・内科第一

高木良三郎

日本組織培養学会第61回大会は、予定通り5月19日(木)より21日(土)までの3日間、大分市のトキハ会館で行われた。20日、21日の両日は雨となったため、近効に足を延ばす予定のあった方々にはお気の毒であったが、大会には予想を上廻る人数の参加があり(延べ300名以上)、“田舎の大都会”での開催の特徴もある程度は生かされたと思っている。これも一重に本大会の企画を担当して下さった先生方ならびに参加された会員、非会員の皆様の御協力の賜と深く感謝している。但し、大会運営に関しては何かと気付かぬ点もあり、御迷惑をかけた節もあったのではないかと思うが、この紙面をかりて御詫びしたい。また、今回は抄録集の作成などすべて自分で行った。これは経費の節減にはなったものの、抄録の校正が徹底せず、誤字、誤植がかなり多かったことは申訳なく思っている。

本大会を振り返ってみると、世話人としての私の心の底にあったものは、functional cultures —— 限りなく in vivo を求めて —— というテーマであった。その表現形が今回の企画となった訳であるが、やや盛沢山の過密スケジュールになった嫌いがあり、一般演題の発表時間が一題12分になってしまった。このため座長の方々には時間の上で御迷惑をおかけした面もあったことを反省している。しかし、一部の演者の方々には自省もこめて、限られた時間内で如何に自らの成果を効率よく括めて表現するかという努力を拂って頂くよう御願したい。開催地にもよろうが、特別講演、シンポジウム、ワークショップ、セッション・イン・デプスなどの企画と、大会本来の目的である一般演題発

表とのバランスは、今後共充分配慮されねばならない問題であろう。

本大会を通じて再認識したことは、組織培養学会が極めて広い領域の研究者により構成されており、それらが“培養”と言う一線で結ばれている極めて heterogenous な集団ということである。一般に heterogenous な方が homogenous な集団より進歩、発展すると言われているが、それも存在様式如何によるであろう。会員はその heterogeneity を最大限に良い方に利用し、相互に専門分野の知識を交流しながら研究を進めて行く努力をすべきだと思う。そこに個人の研究の発展があり、独りよがりになることが防止され、さらには学会全体としての活性化にも繋るのではなかろうか。学会が大きくなるにつれ、そのスケールと逆比例して本来の目的、精神から次第に離れた方向に流れる可能性がある。本学会が、かつては少人数ながら40才以前の年令層によってのみ運営され、極めて学究的な研究会でスタートしたことに思いを至し、時代の要求に対応しつつも創立の精神を失うことなく、情熱をもってその運営に、そして発展に努力して行きたいものである。

最後になったが、本大会に参画された賛助会員、業者の方々の御協力に衷心より御礼を申し上げたい。

§ 日本組織培養学会秋のシンポジウム

本学会では、大会の開催が毎年春1回になったのにもない、秋にシンポジウムを開催してきました。本年秋の第3回シンポジウムは、動物実験代替法研究会（会長 菅原努 京大名誉教授）との共催で、二階堂 修（金沢大・薬）、大野忠夫、金子一郎（理研）、山田武（放医研）の各氏のお世話で、下記のように合同シンポジウムを開催いたすことになりました。

近年、諸外国において動物実験に対する種々の反対運動が高まりをみせております。組織培養の技法は、このような実験動物の代替法として、またそれに優るとも劣らぬ Replacement（代替）の技法としてだけではなく、動物実験よりも経費や労力、期間などを少なくすることができる Reduction（縮小）、さらに動物実験よりもより条件を厳密に現定でき、再現性や定量性においてすぐれた Refinement（洗練）の3つの“R”をもった技法として、大きな有用性をもっております。

今回のこのシンポジウムでは、各種薬剤の毒性検定系や、がん原性、変異原性、催奇形性検出系としての組織培養の利用に加えて、組織培養法を利用した各種の生理活性物

質の生産など、組織培養法の新しい利用法について講演、討議されます。組織培養法が将来、ヒトへの外挿理論の確立をめざして、本シンポジウムに多数の方々が参加されることを期待しております。

日本組織培養学会・動物代替法研究会

合同秋季シンポジウム

主 題：動物代替法としての組織培養——in vitroの系がin vivoの系にどこまで迫れるか——

世話人

二階堂 修 (金沢大・薬)

大野 忠夫・金子 一郎 (理研)

山田 武 (放医研)

日 時：昭和63年10月18日(火) 9:30~17:00

会 場：東京医科歯科大学5号館講堂

東京都文京区湯島1-5-45 (TEL 03-813-6111)

プログラム

9:20 開会の挨拶 黒田 行昭 (日本組織培養学会会長)

9:30 基調講演 座長 黒田 行昭

動物実験代替法の目指すもの 菅原 努 (代替法研究会会長)

1) 組織培養法を用いた各種毒性試験

座長 金子 一郎 (理化学研究所)

10:00 ウサギ眼由来細胞を用いたドレイズ試験法の代替

渡辺 正巳 (横浜市立大学医学部)

10:35 マウス胚培養を用いたLD₅₀検定法 山田 武 (放射線医学総合研究所)

座長 大野 忠夫 (理化学研究所細胞バンク)

11:10 昆虫由来培養細胞を用いた毒性検定 三橋 淳 (東京農工大学農学部)

11:45 魚類由来培養細胞を用いた代替法 嶋 昭紘 (東京大学理学部)

12:20 昼食休憩

2) 組織培養法を用いた変異原性、がん原性試験

座長 渡辺 正巳 (横浜市立大学医学部)

13:10 培養哺乳動物細胞を用いた変異原性、がん原性の検定法

梅田 誠 (横浜市立大学木原生物研)

13:45 ツバピア由来培養細胞を用いた変異原検出法

武富 真子 (日本たばこ生物実験センター)

3) 組織培養法を用いた催奇形性試験の代替

座長 谷村 孝 (近畿大学医学部)

14:20 ラット全胚培養による催奇形性試験系の開発

江藤 一洋 (東京医歯大歯学部)

14:55 全胚培養の薬剤発生毒性評価への応用

松本 信雄 (東京滋恵医大)

15:30 休憩

4) 組織培養を用いたバイオマテリアルと生理活性物質の生産

座長 梅田 誠 (横浜市立大学木原生物研)

15:50 バイオマテリアルと組織培養

赤池 敏宏 (東京農工大学工学部)

16:25 培養動物細胞によるヒト生理活性物質の生産

渡辺 幸彦 (シオノギ製薬研究所)

17:00 閉会の挨拶

世話人代表 二階堂 修 (金沢大学薬学部)

18:00 懇親会

東京医科歯科大学学生協 2階の予定

§ 日本組織培養学会細胞バンク小委員会の発足について

理化学研究所 大野 忠 夫

先の第61回大会の総会で、議題項目の最後に横浜市大の梅田誠会員から、第61回大会で取り上げられたワークショップ“細胞バンク”の成果を受けて、細胞バンクに関する様々な問題を討議し、学会としての意見をまとめるために、細胞バンク小委員会を設置したらどうかという提案があり、承認された。その後、この具体的な内容が梅田会員と黒田会長の間で検討され、会長判断によりとりあえず“小委員会”として発足させることとなり、第1回の会合が7月2日東京でもたれた。

出席者：黒田行昭（会長，遺伝研），大野忠夫（理研），佐藤二郎（岡山大），鈴木利光（新潟大），竹内昌男（発酵研），長山英男（東北大，入会予定），許南治（東大医科研），松村外志張（明治乳業），水沢博（国立衛試），三井洋司（微工研）

討議内容：

1. 会の性格について：この“小委員会”は総会で設置が承認されたものの、幹事会の議を経ているわけではないので、学会の組織上の位置付け等の性格が曖昧なまま残されており、次回幹事会で検討してもらうこととなった。
2. この“小委員会”の委員長，副委員長，書記にそれぞれ梅田，大野，水沢各会員が推薦された。
3. 佐藤前会長から株名登録委員会の活動経過の説明があった。
4. 以下の問題点について，持ち寄った資料をもとに自由討議を行い，次回以降，分担者が作成したたたき台をもとに討議を進めることとなった。
 - (1) わが国に於ける細胞バンク間の有機的連携を保つための情報交換
 - (2) 細胞情報に関するデータベース統一仕様の作成
 - (3) 細胞の品質管理のための標準技術仕様の作成
 - (4) 細胞の所有権に関するコンセンサスの策定

また、今後

(5) わが国における細胞バンク運営方針
に関する討議も行うこととした。

5. 討議の期間を当面2年間とし、結果を学会案としてまとめ、幹事会、総会を経て公表することとした。

§ お知らせ

1. 日本組織培養学会編「組織培養の技術第2版」朝倉書店刊、学会々員には割引価格で頒布中。御利用下さい。

2. 財バイオインダストリー協会（BIDEC）が主催し、日本組織培養学会も協賛する東京国際バイオ・フェア「Bio FAIR Tokyo '88」が下記の要領で開催されます。

シンポジウム：昭和63年10月19～22日

バイオ展：昭和63年10月20～23日

場 所：京王プラザホテル、東京・新宿

詳細は下記までお問い合わせ下さい。

「'88東京国際バイオ・フェア」

主催：財バイオインダストリー協会（BIDEC）

〒105 東京都港区新橋5-10-5 同和ビル

TEL 03 (433) 3545

FAX 03 (459) 1440

3. 昭和64年度日本組織培養学会第62回は、昭和64年6月29・30日の予定とのことです。詳細は次号で。

§ 編集後記

- 佐藤二郎前会長をはじめ、旧幹事の皆様、御苦勞様でした。
- 体制一新後、初の会員通信をお届けします。学会の右も左も呑みこまないうちに、ふとした運命のいたずらで会員通信を担当することになりました。何とか形になっているとしましたら、両御目付役、許、間中両先生のお陰です。
- 不手際で第61回大会の印象記を掲載することができませんでした。お詫び致します。新会長も述べておられますように、非常によく組織化され、収穫の多い大会だったと思います。勿論、学会場以外でも得ること多しの大会でした。
- 新会長のごあいさつにもありましたように、ユニークな歴史をもつ本学会の、歴史としてではないユニークさを維持すること、それが問題なのでは。秋のシンポジウムの盛会と、各種委員会の活発な活動、会員の皆様の会員通信への御参加を祈念して。

万緑の樹海 雲を呑み 水を吐き

(T.S.)

§ 新 入 会 員

(正会員)

氏 名	現 住 所	所 属 機 関 ・ 所 在 地
阿 部 康 次	〒386 上田市中央 2-24-10 ☎0268-24-5995	信州大学繊維学部機能高分子学科 *〒386 上田市常田 3-15-1 ☎0268-22-1215
市 場 康 子	〒870 大分市大石町 5-3-3 コーポ東 亜 4-103号 ☎0975-49-4056	大分医科大学内科第1 *〒879-56大分県大分郡扶間町医大ヶ丘 1-1506 ☎0975-49-4411
氏 家 邦 夫	〒146 大田区仲池上 2-10-16 森永池 上寮 ☎03-760-9088	森永乳業株式会社生物科学研究所 *〒153 目黒区目黒 4-4-22 ☎03-792-3936
金 子 隆 司	〒346 久喜市吉羽 1407-1	コスモ開発研究所 *〒340-01幸手市権現堂 1134-2 ☎0480-42-2297
白 川 浩	〒417 富士市高島町 40, E-37 ☎0545-53-0688	富士市立中央病院泌尿器科 *〒417 富士市高島町 50 ☎0545-52-1131
白 畑 爽 隆	〒861-21熊本市秋津町沼山津 571-10 ☎096-367-0831	尚綱短期大学家政科食物栄養専攻 *〒862 熊本市九品寺 2-6-78 ☎096-362-2011
清 家 正 隆	〒879-56大分県大分郡扶間町医大ヶ丘 3-18-21 ☎0975-83-3913	大分医科大学内科第一 *〒879-56大分県大分郡扶間町医大ヶ丘 1-1506 ☎0975-49-4411
妹 尾 三 郎	*〒386 上田市常田 3-15-32 ☎0268-24-2059	信州大学繊維学部機能高分子学科 〒386 上田市常田 3-15-1 ☎0268-22-1215
田 中 憲 穂	〒258 神奈川県足柄上郡松田町寄 5382 ☎0465-89-2217	(財)食品薬品安全センター桑野研究所細 *胞生物部 〒257 桑野市落合 729-5 ☎0463-82-4751
橋 爪 秀 一	〒236 横浜市金沢区並木 3-7-4-1303 ☎045-783-2510	森永乳業株式会社生物科学研究所研究グループ *〒230 横浜市鶴見区下末吉 2-1-1 ☎045-572-8247
保 地 真 一	〒329-05栃木県下都賀郡石橋町石橋 773-3 SKマンション 2-D ☎0285-53-7648	雪印乳業株式会社生物科学研究所 *〒329-05栃木県下都賀郡石橋町下石橋 519 ☎0285-53-1551
丸 尾 匡 宏	〒879-56大分県大分郡扶間町古野郷団地 4組 ☎0975-83-4693	大分医科大学内科第一 *〒879-56大分県大分郡扶間町医大ヶ丘 1-1506 ☎0975-49-4411
三ッ木 健 二	〒813 福岡市東区御島崎 1-22-303 ☎092-672-8293	九州大学医学部第一内科 *〒812 福岡市東区馬出 3-1-1 ☎092-641-1151

(賛助会員)

機関名	所在地
明治製菓㈱中央研究所	〒222 横浜市港北区師岡町 760 ☎045-541-2521

§ 住所変更

氏名	現住所	所属機関・所在地
秋本俊彦	〒132 江戸川区松江 5-16-6 品川ハイツ 106 ☎03-869-6753	第一製菓㈱中央研究所 *〒134 江戸川区北葛西 1-16-13 ☎03-688-0151
岩井雅彦	*〒227 横浜市緑区青葉台 2-6-15 ベルグレイス青葉台 507 ☎045-981-3298	岩井皮フ科 〒277 横浜市緑区青葉台 2-5 アレック ス青葉台 3F ☎045-984-4747
大井清源	*〒631 奈良市丸山 1-1079-194	東洋紡績㈱総合研究所 〒520-02大津市堅田 2-1-1 ☎0775-73-2111
門谷久仁子	〒253 茅ヶ崎市松が丘 1-11-12 ☎0467-86-3981	北里大学医学部病理学教室 *〒228 相模原市北里 1-15-1 ☎0427-78-8998
蔵永伊織	*〒662 西宮市両度町 4-2-306	住友製菓㈱研究所 〒554 大阪市此花区春日出中 3-1-98
小山恒太郎		丸紅飼料㈱技術センター *〒675-13小野市新部町小垂 1292 ☎07946-6-2121
佐々木澄志	〒254 平塚市高村 203 平塚高村団地 18号棟 801 ☎0463-35-0558	㈱食品薬品安全センター桑野研究所細胞生 *物学研究部 〒257 桑野市落合 729-5 ☎0463-82-4751
佐藤美知子	〒960 福島市森合字後口 22-14 ☎0245-57-8876	福島県立医科大学病理学第一講座 *〒960-12福島市光が丘 1 ☎0245-48-2111
白川弘泰	〒526 長浜市平方町 1214-5 メゾン ・ド・シャンドーレW202 ☎0749-65-1510	白川眼科クリニック *〒526 長浜市八幡東町 84-4 ☎0749-64-1007
情野一郎	*〒662 西宮市高塚町 2-14 アロウン タカツカ 307	日本シンテックス㈱

氏名	現住所	所属機関・所在地
高木道生	*〒277 145-9 柏市大室 1086-71 柏ビレジ ☎0471-33-9519	高木医院 〒125 葛飾区亀有 3-33-4 ☎03-601-2218
豊田好洋	〒184 6 小金井市本町 3-1-24 稲葉荘 ☎0423-85-8937	東菱薬品工業㈱青梅研究所微生物化学研究 *室 〒198 青梅市末広町 1-7-1
中山政明	〒812 福岡市東区松島 2-5-18-2 ウ メズハイツ 303 ☎092-611-6478	川崎町立病院 *〒826 福岡県田川郡川崎町大字川崎 3063 ☎0947-73-2171
永井 彰		東海大学海洋学部水産学科 *〒424 清水市折戸 3-20-1 ☎0543-34-0411
名古屋 隆生	〒359 301 所沢市若松町 842-2 ハイコー ☎0429-95-6786	興和㈱興和総合科学研究所 *〒305 つくば市観音台 1-25-5 ☎02975-4-4611
新田耕作	〒735 4-9-4 広島県安芸郡府中町本町 ☎082-281-3563	広島大学医学部第二外科 *〒734 広島市南区霞町 1-2-3 ☎082-251-1111
野沢 龍嗣		静岡県立大学食品栄養科学部微生物 *〒422 静岡市谷田 395 ☎0542-64-5554
林 潤一	〒173 板橋区氷川町 29-4	杏林大学医学部高齢医学教室 *〒181 三鷹市新川 6-20-2 ☎0422-47-5511
原 利通	*〒174 板橋区前野町 6-2-3-106 ☎03-967-3509	東京医科歯科大学歯学部第二口腔外科 〒113 文京区湯島 1-5-45 ☎03-813-6111
半田 康延	〒980 仙台市大和町 2-63 ☎022-292-1439	東北大学医学部解剖学第一講座 *〒980 仙台市星陵町 2-1
水野 丈夫	〒176 練馬区桜台 6-30-15 ☎03-993-4829	帝京大学薬学部生物学教室 *〒199-01 神奈川県津久井郡相模湖町寸沢嵐 1091-1 ☎04268-5-1121
三橋 淳	〒112 文京区小石川 1-28-13 ☎03-811-5064	東京農工大学農学部植物防疫学科寄虫学研 *究室 〒183 府中市幸町 3-5-8 ☎0423-64-3311
光本 泰秀	〒920 406号 金沢市東山 1-3-3 土井コーポ ☎0762-52-1736	北陸大学薬学部附属創薬研究施設第二研究 *部 〒920-11 金沢市金川町ホ -3 ☎0762-29-1161

氏 名	現 住 所	所属機関・所在地
源 良 樹	〒241 横浜市旭区二俣川 1-59-14 ☎045-363-5488	味の素㈱中央研究所応用研究所 *〒210 川崎市川崎区鈴木町 1-1
守 屋 宏 毅	〒520-02 大津市堅田 2-1-3-82 ☎0775-73-5636	東洋紡績㈱医薬品生産センターKU4 *〒520-02 大津市堅田 2-1-1 ☎0775-21-1435
横井山 晶 子	〒410-23 静岡県田方郡大仁町宗光寺 875-36 ☎0558-76-3888	国立遺伝学研究所分子遺伝研究部門 *〒411 三島市谷田 1111 ☎0559-75-0771
吉 田 清 三	*〒921 金沢市つつじが丘 153	